

朱と石灰

株式会社 バルクワールド 川 添 洋

健康で長生きを望むのは世の常で、現在でも健康薬は花盛りですが、それは昔も同様でした。その最たるものは不老長寿の霊薬で、秦の始皇帝が“延年益寿薬”を蓬萊山に求めて徐福を船で送り出した話は有名です。不老長寿まで求めないにしても、疫病とか降りかかる病は多数あり、人はそれに抗する薬を自然に求めました。紀元前4～3世紀に書かれたとされる中国最古の地理物産書である『山海經』には、植物類150余、動物類270余、鉱物類60余の薬効ある物が書かれています。その中でも珍重されたのが丹薬としての朱でした。朱は朱沙（朱砂）／丹砂／辰砂とも呼ばれる硫化水銀（HgS）の事で、その鮮やかな赤色の水銀原鉱が古代の人々の生活に密着していた事は、重さの単位に“銖”やお金の単位に“朱”が用いられた事からも想像できます。ちなみに、自然から産する水銀は鮮赤色で比重も13.6と、体温計で見慣れた銀白色で比重8.1の精錬水銀とは異なります。

日本列島で朱が使われ出したのは縄文時代の中頃とされており、赤漆の弓とか埋葬時に床に撒かれて出土していますが、この他、『魏志倭人伝』には“以朱丹塗其身體”とあり人々が日常に用いていた事がわかります。

右写真は中国湖南省産の辰砂で硫化水銀が粒状の結晶となっていますが、日本では地表が朱分で染められた土壌とか、または粘土脈／石英脈或いは金／銀／銅等を含む母岩の割れ目などに



見いだされます。この朱を採掘する事を生業にしていたのが、後の丹生氏及び壬生氏の系譜に繋がる人々で、それは『豊後風土記』の中に“昔の人は、この山の沙を取って朱沙に用いた。それで丹生の郷という。”とあるように、その民が植民した所は丹生神社とか丹生（入・塩）地名が残っている事から辿る事ができ、又、その歴史は弥生時代の銅剣・銅鐸にも重なります。

さて、興味深いのは朱／水銀が石灰岩地帯にも随伴する事です。それはスカルン鉱床での熱水が高温の場

合はタングステン・錫・鉄等が、中～低温では銅・亜鉛・鉛の鉱床が形成される事からも肯える事で、主に中央構造線に沿って点在しています。例えば、白杵／佐伯／津久見市域には鶴望・千怒等の水銀鉱山があり、又、丹生島や大入島地名が残ります。田川／香春も朱産地で、中でも船尾山は“この山名は古くは丹尾山で、丹・舟の両字体の相似からきた丹生山”と松田氏は『丹生の研究』で指摘しています。四国・鳥形山の西には辰砂を産する不入山があり、須崎市には入戸地名があります。高知市の五台山は朱産地で仁井田地名があり、又、阿南市水井には古くから水銀鉱山がありました。宇部市には丹生神社があり、美祢市には宗国鉱山で辰砂を産し、秋芳町別府には壬生祠があります。井原市芳井町には丹生地名があり、滋賀犬上郡多賀では辰砂が採掘され、又、米原市には丹生地名が残っています。敦賀市は松田氏に依れば朱産地で、いなべ市には丹生地名があり、大垣市赤坂山の金生山化石館には産出した辰砂が銅や鉄の鉱石と並び展示されています。それから、東京奥多摩町氷川に丹生神社があり、秩父も浦山鉱山等で水銀が採取され、飯能／日高にも丹生神社は散在し、阿武隈山系も松田氏は水銀の鉱床が著しいとしています。更に、東北の黒鉱鉱床に於いても、大船渡域には辰砂を産出した世田米／蛭子館鉱山があり、八戸には新井田地名、及び、朱が出土しており、又、尻屋は津軽海峡を挟んだ対岸の函館市の恵山に水銀鉱山がかかってあり、地層的に繋がっていると思われます。（尚、岡山・新見地域は弁柄を産出しており、弁柄も朱と同様に珍重されました。）

縄文時代を代表する是川遺跡・三内丸山遺跡、弥生時代の吉野ヶ里遺跡等の近郊に朱産地がある事は興味深い事ですが、又、辰砂採掘地である若杉山遺跡（徳島／水井）で貝と一緒に出土している事も同様です。これは、近代の水銀精錬の際に辰砂と生石灰を混ぜて精錬滓を生成させる事との相似を連想させる事柄です。ともあれ、鉱工に携わった先人の存在があって各時代は切り拓かれてきたと言え、そしてそこには辰砂や各鉱石の他に石灰がありました。